

P-3 ラット根末完成歯に対する外傷の影響

○渋谷 拓, 久芳 陽一, 豊村純弘, 村上憲二
本川 渉, 谷口邦久*, 北村勝也*

福岡歯科大学小児歯科学講座
*福岡歯科大学口腔病理学講座

小児歯科臨床において、歯の脱臼はしばしば経験される。根末完成歯が脱臼した場合、予後において歯根、歯周組織および歯髄には種々の変化が生ずる。当教室では、外傷が歯牙に及ぼす影響について、実験的研究を行っているが、先にラットの幼若臼歯を用いて不完全脱臼をおこさせた実験的検索において、歯根の形成障害および歯髄に不規則象牙質の形成や、歯髄腔の狭窄などが生じることを報告した。また、歯根形成度と予後との関係について、根末完成歯ほど歯髄腔の狭窄が多く見られたとの臨床的研究もみられることから、外傷を受けた時期の根完成度と予後における歯根や歯髄の変化との相関については興味ある点である。

そこで今回、演者らは、ラットを用い、上顎第一臼歯の近心根の完成1/2(生後21日前後)2/3(生後40日前後)、3/4(生後8週頃)の時期に不完全脱臼を起こさせ、予後における歯根や歯髄の変化について病理組織学的検索を行った。

実験には、ウィスター系雄性ラットを用い、上顎の左側第一臼歯を実験歯とし、右側第一臼歯をコントロールとした。実験はラットをネンブタール腹腔内注射による全身麻酔下に、本教室で考案した牽引式脱臼装置を用い、約1.5Kg ~3.5Kg の加重をかけて上顎の左側第一臼歯を不完全脱臼させた。脱臼後、直ちに歯牙を元の状態に戻し、止血を行い実験を終了した。

実験後、術直後、術後1日、3日、5日、7日、2週、4週、8週で屠殺し、直ちに上顎臼歯部を摘出し、10% 中性ホルマリンで固定後、蟻酸にて脱灰し通法に従い5 ~7 μ m のパラフィン連続切片を作製、H・E染色を施し鏡見したので報告する。

P-4 齶蝕活動性試験 (MSBB) を用いた齶蝕罹患傾向の予測について

○國武 哲治, 松本 光恵, 柏木 伸一郎,
立川 義博*, 中田 稔*

(小児歯科柏木医院・福岡市)
(*九大・歯・小児歯)

当医院では近年、齶蝕好発時期である3、4歳以前に来院する患児が増えている。これらの患児をみても、齶蝕罹患率はそれほど高くはないが、歯を取り巻く環境は齶蝕発生の危険をはらんでいる場合が認められる。したがって、この時期に将来の齶蝕発生の危険性を予測し、口腔内環境の改善をはかることが齶蝕予防において重要であると思われる。

我々は、第9回、第10回日本小児歯科学会九州地方会において、齶蝕活動性試験 (MSBB) を用いた患児のリスク分けとリコール管理について報告した。その結果、齶蝕活動性試験が低年齢児の齶蝕予防管理に有効であることが示唆された。

そこで今回は、より長期の齶蝕罹患傾向の予測が可能かどうか調査した。

調査対象は、MSBB摂取時年齢1~3歳で、1年以上3年まで経過が追えたものとした。各年齢ごとに、MSBB摂取時までの齶蝕の有無およびMSBBの値と新生齶蝕の関係を調べ、若干の知見を得たので報告する。

また、その結果を用いて、低年齢児のリコール管理の改善をはかったので、合せて報告する。